研究発表

イヌの社会受容に関する基礎的調査

—飼育経験および好悪感による影響—

助川東悟¹⁾・野瀬 出^{1)*}

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室

A study on the social acceptance of dogs: The influence of dog ownership experience and preferences

SUKEGAWA Tougo¹⁾, NOSE Izuru^{1)*}

Laboratory of Comparative Developmental Psychology, Nippon Veterinary and Life Science University

目的

社会受容 (social acceptance) とは、対象が地域社会や人々の理解を得て受け入れられることである。社会受容が成立するためには、対象の社会的価値を周知させ、法律や規約などのルールを整備するだけでなく、人々が対象に対して肯定的な態度を形成しているか、少なくとも否定的な態度を形成していない状態であればならない。

動物介在介入を普及させるためには、介在動物が社会的に受け入れられている必要がある。動物が同じ空間にいることに対して人々が否定的である場合は、広く浸透させることが難しくなる。本研究では、公共空間にイヌを入れることを人々がどの程度受け入れているかについて Web 調査を実施した。また、イヌの社会受容に影響する要因について明らかにするため、回答者の基礎的属性 (性別、年齢、飼育経験、居住地域等) との関連性について検討した。

方法

対象 日本に在住している 18 歳～65 歳の成人が対象であった。データ収集は Web 調査会社 (クロス・マーケティング) に依頼した。イヌの飼育経験者と非飼育経験者との割合が半々になるように調整した。参加者には Web 画面上で調査内容について説明し、参加の承諾を得た。調査は匿名で実施し、個人が特定可能な情報は収集しなかった。

質問票 イヌが公共空間に滞在している状況について、受容できるかどうか 5 段階での評定を求めた (1: 受け入れられない—5: 受け入れられる)。公共空間

は、現時点においてイヌの同伴が完全には認められていない 4 つの場面 (飲食店、スーパーマーケット、電車、航空機) を選択した。イヌは状態 (ケース・カートに入れられている、リードにつながれている) とサイズ (小型犬、大型犬) が異なる 4 種類に加えて、対照条件として全ての場面での同伴が認められている「リードにつながれた盲導犬」を選択した (例: 飛行機内に「リードにつながれた大型犬」がいた場合、あなたはどの程度受け入れられますか。航空会社の許可は得られているものとします)。さらに個人特性を把握するため、回答者の性別、年齢、居住地域、イヌの飼育経験 (飼育環境、飼育犬種)、イヌに対する好悪感、パーソナリティ特性 (TIPI-J; 小塩他 2012) について回答を求めた。

結果

イヌの飼育経験者 150 名 (男性 79 名、女性 70 名、その他性別 1 名、平均年齢 37.83 歳)、および非飼育経験者 150 名 (男性 58 名、女性 91 名、その他性別 1 名、平均年齢 45.99 歳) の計 300 名から回答を得ることができた。それら全てのデータを分析対象とした。

全般的な社会受容度 場面およびイヌの種類ごとに平均社会受容度を算出した (表 1)。盲導犬はどの場面においても社会受容度が高かった。場面 (4) × イヌの種類 (4; 盲導犬除く) の 2 要因の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であった ($F(9,2691) = 17.74, p < .001$)。社会受容度はリードにつないだ状態よりもケース・カートに入った状態で高く、同じ状

* 連絡先: inose@nvl.u.ac.jp

表 1 各条件における平均社会受容度 (5 段階評価)

場面	リードにつないだ	ケース・カートに	ケース・カートに	リードにつないだ	リードにつないだ
	盲導犬(対照条件)	入った小型犬	入った大型犬	小型犬	大型犬
飲食店	4.59	3.96	3.62	3.58	3.30
スーパー	4.65	3.75	3.35	3.17	2.95
電車	4.67	3.92	3.47	3.02	2.76
航空機	4.60	3.65	3.35	3.05	2.75

態であれば大型犬よりも小型犬で高かった。場面については飲食店で比較的高く、航空機内で低かった。特に航空機内や電車内ではケースやカートに入っていないと受容されにくい傾向があった。

個人特性との関連性 盲導犬を除く全条件の平均社会受容度を算出し、個人特性との関連性について分析した。回答者の性別や年齢、居住地域による社会受容度の違いは認められなかった。イヌの飼育経験がある回答者は、飼育経験がない回答者よりも社会受容度が高かった (飼育経験あり=3.62, 飼育経験なし=3.10 ; $t(298)=4.03, p < .001$)。また、イヌを好ましいと思っている回答者ほど社会受容度が高くなっていた (相関係数 $r=.40, p < .001$)。社会受容度と回答者のパーソナリティ特性との関連性は見いだせなかった。

考察

調査の結果、イヌに対する社会受容度は飲食店で高く、航空機内で低いことが明らかになった。特に、航

空機や電車といった移動制限を伴う閉鎖的空間においては、イヌをケースやカートに収容することが求められている。一方、盲導犬に関してはいずれの場面においても社会的に受け入れられていた。個人特性との関係については、イヌの飼育経験やイヌに対する好意的感情によって社会受容度が高くなっていた。公共空間にイヌが入ることの受容には個人差が存在するため、同伴可能な空間を区分けする等の配慮が必要であろう。

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

文献

小塩真司, 阿部晋吾, カトローニ・ビノ. 2012. 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21, 40-52.